

シンポジウム 「より高度な小児歯科医療を目指して」

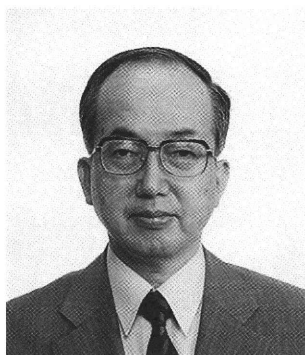
座長 鹿児島大学 大学院医歯学総合研究科 小児歯科学分野

教授 山崎 要一

1. 今日の乳歯歯内療法の限界と可能性 —FC-CV法からの展開—

河田小児歯科医院(岡山市)

院長 河田 安史



略歴

昭和 47 年 広島大学歯学部歯学科卒業
昭和 47 年 岐阜歯科大学 小児歯科講座 助手
昭和 50 年 石筍会広島歯科勤務
昭和 50 年 広島大学歯学部口腔生化学講座研究生
昭和 54 年 河田小児歯科医院院長
昭和 63 年 日本小児歯科学会認定医
平成 6 年 日本小児歯科学会学外評議員
平成 17 年 日本小児歯科学会専門医

子供は成長しつつ生きている存在故、組織や細胞の vitality は非常に遅しく、生体の生理的のみならず病理的側面においてもそれが反映されることになります。乳歯が環境からなんらかの侵襲を被ると、生体の応答と係りつつ、病巣は瞬く間に拡大し固有組織を破壊してゆきます。特に歯根や歯槽骨の病的吸収は drastic で、急速に進行して拡大を続けるため、確実に患歯の早期喪失に至ります。一方乳歯に h、成長に向け、歯根が安定期を経た後生理的に吸収されるという dynamic な特有の性質が内在しているので、歯根内外での異常は時系列の中で一層複雑化します。乳歯の歯内療法を難しくしている所以は、それらが制御不能の次元にあるからではないでしょうか。

それ故今日尚、乳歯の根尖病巣や歯根の外部および内部吸収が severe になると、歯内療法の適応症から外されています。また小児歯科学の誕生以来、確固たる乳歯の感染根管治療法も未だ定まらず百家争鳴の感がします。

曾て演者は、抜歯とされた乳歯内部吸収性歯周炎に対して、病的吸収巣を硬組織再生の場に変え硬組織性瘢痕治癒に導く歯内療法 (FC-CV 法) を創出しました。1) 更にその evidence に基づいて感染根管治療を行うことにより、前述の保存困難な乳歯根尖性歯周炎においても、同様の硬組織性瘢痕治癒と長期に安定した予後を得ることが出来ました。2) 乳歯歯内療法の既述の状況からの突破口として、今回これらの症例を俎上に上してみたいと思います。

参考文献

- 1) Kawata, Y. : Better dental care for children toward the 21 st century (proc of 13th cong. of IADC) : 167, 1992.
- 2) 河田安史 : 小児歯誌, 44 (2) : 185, 2006 (抄)